

平成20年11月の解説（府県天気予報）

【11月の天候状況】

上旬は、北日本では天気が短い周期で変わりました。東日本以西では旬中ごろ前と後に気圧の谷が通過し天気が崩れ、その後は日本の南に前線が停滞したため曇りや雨の日が続きました。中旬の始めは日本の南に停滞した前線の影響で、東日本以西で曇りとなりましたが、中ごろは移動性高気圧に覆われて概ね全国的に晴れました。後半は気圧の谷の通過後、日本付近に強い寒気が南下し、冬型の気圧配置が強まりました。このため日本海側では雪や雨となりました。下旬の始めは北日本を中心に冬型の気圧配置となり、東・北日本の日本海側では曇りや雨または雪となりました。その後は短い周期で低気圧が日本付近を通過し、全国的に天気が崩れました。

月を通しての日照時間は北日本で平年より多くなり、東・西日本では少くなりました。降水量は九州南部地方で平年より多くなりました。気温は沖縄地方で平年より高くなりました。

【11月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報で87%、明後日予報で85%とそれぞれ例年^(注)より3ポイントと5ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報は北海道、北陸、中国、沖縄地方で6ポイント例年より高くなりました。明後日予報は北日本から中国・四国地方で4から7ポイント例年より高く、沖縄地方で11ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は北日本から西日本にかけて例年より0.3前後小さくなり、全国平均では例年より0.2小さい1.5でした。また、最低気温の予報誤差はほぼ全国的に例年と同じで、全国平均では例年より0.1小さい1.5でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の天気予報から】

26日17時に発表した明日の天気予報では、27日の東京地方の天気を「曇り、夜雨」と予報しました。27日の日中はごく弱い雨が予想されているものの、まとまった雨が降り始めるのは西から低気圧や前線が接近してくる（図1）夜になってからと考えたからです。

実際には、27日昼前から昼過ぎにかけても、東京地方や神奈川県を中心に多いところで5ミリ前後の雨が降り

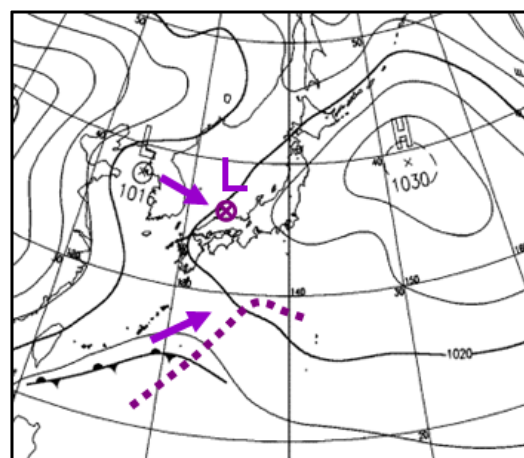
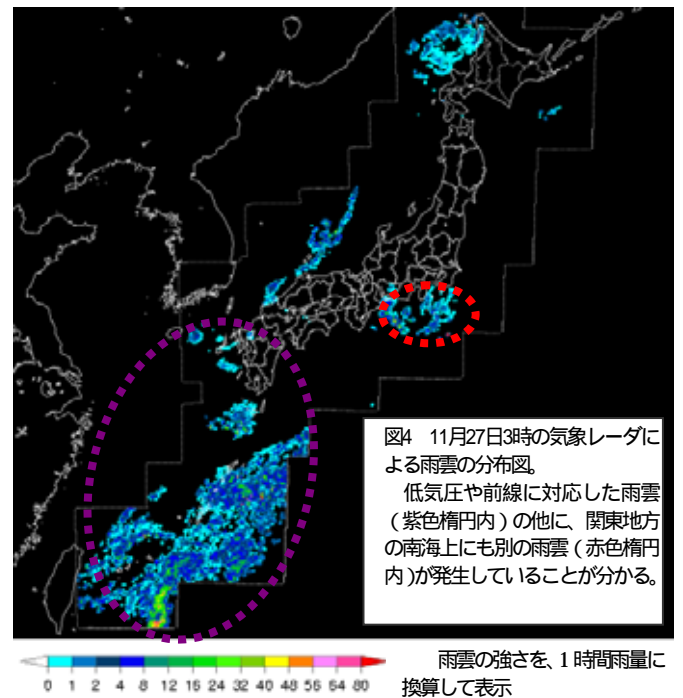
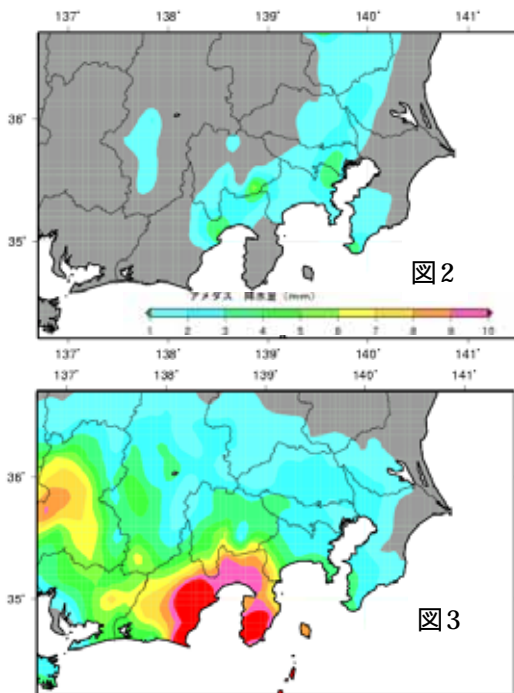


図1 11月26日9時の資料をもとにした、11月27日9時の予想地上天気図。さらに12時間後、27日21時の低気圧（「L」表記）と前線（点線表記）の予想位置を紫色で示している。

ました(図2)。日中に降った雨は、低気圧や前線に伴う夜の雨(図3)とは別の要因で、水平スケールが100~200km程度の規模の小さい現象によるものでした。こうした現象は、雨の降る範囲や雨の量を事前に精度良く予想することが困難な場合があります。

この27日の例でも、前日17時発表の時点では日中の雨を予報できませんでしたが、当日05時の発表では、最新の予想資料や関東の南海上の雨雲の分布(図4)などから、予報官が日中の雨も予想して「曇り時々雨」という予報にしています。

今回の事例のように、スケールの小さい現象による天気の変化は、現在の予報技術では事前に精度良く予報できないこともあります。今後も、より早い段階からの的確な天気予報が発表できるよう取り組んでいきます。



【1月の天気予報の利用にあたって】

1月には北日本や東日本の日本海側を中心に雪が降り、雪の多い地方では積雪も次第に深くなりますが、気温が高い時には雨が降ることもあります。2006年1月13日から14日にかけて低気圧が日本付近を通過して北海道地方では雪、東北地方から南の地方では雨が降り、一部では大雨となりました。積雪が多い地方ではこの大雨と気温の上昇により各地で雪崩が発生しました。

このように多雪地域では、大雨や雪融けによって河川の増水や低い土地での浸水、雪崩や土砂崩れなどが発生することがありますので、天気予報で雨や気温の上昇が予想される時には注意が必要です。